
バカとテストと転生者の物語。

泉 龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと転生者の物語。

【Nコード】

N8913V

【作者名】

泉 龍牙

【あらすじ】

美川香は極々普通の高校生……だが、それは表のみ。裏では？
チンピラ狩り？としてかなり有名だった。そんな香はある日、とあるチンピラに殺されてしまう。死んでしまったとの自覚がはっきりあり、「短い人生の幕を閉じたな」と思っていた、その時！ 香は神様に日ごろの感謝として、死ぬか転生するかという二択を与えられた！ 勿論後者を選び、香は転生し、刹那翠という名前^{ストーリー}で再び人生の幕を開けた。
gdgd腐作者が贈る、gdgd物語。

前言撤回。

原作とは全く関係ありません、と書いていたましたが、
暫くは原作寄りで行かせて頂きます。

零問目

私は、歩いていった。普通に歩道を歩いていた。何も変わったことはしていない。そこんじよらのチンピラのように人を脅したり、そこんじよらのチンピラのように人を殴ったり、そこんじよらのチンピラのように人を蹴ったりなんて一度もしたことがない。：人を殴るくらいはあった（気がする）が金目当てではなかった。逆に金目当てで襲ってくるやつを返り討ちにするくらいだ。

「おい、その讓ちゃん。ちょっとお兄さんたちに着いてきてくれるかなあ？」

主チンピラどもにこういう奴らをフルボッコにするために殴る。

相手は……5人か。刃物さえ持っていなければ余裕だな。一人ならまだ大丈夫か。

「解りました」

とりあえず話しかけられたら着いていく。

チンピラが連れて行く場所はやっぱり…人通りの少ない路地裏。

「讓ちゃん、怪我したくなかったら金渡せや」

私は金髪に襟首をつかまれる。

「反抗するなら殺したっていいんだぜ？」

茶髪の男が胸の前で腕を組みながらニヤニヤしている。

こういうふざけた奴は嫌いだ。気持ち悪い。

「悪いが私は金など持ってないぞ。私はバイト帰りだ」

「嘘つけ！ 街でそんなカツコして歩く奴がバイト帰りなわけないだろうっ！！」

金髪は私を壁に叩き付けた。背中に激痛が走る。骨折はしてないな。

ちなみに嘘はついていない。本当にバイト帰りだ。コンビニのアルバイトを終わらせてきた。

「っ…………」

「金さえ出せば痛い目見なくて済むんだぜ？」

「…そうか。そんなに警察送りにされたいんだなお前ら」

私は立ち上がり、指をポキポキ鳴らす。

「女一人で男に勝てると思ってんのか？」

黒髪でデコピアスをした男は腹が立つているようだ。

「相手が悪かったな。私は柔道・剣道・武道・弓道・少林寺をマスターしている。あと、いざという時の為に短剣も所持しているぞ」

そういいながら髪を結び、ポケットから取り出した頭に赤いバンダナをつける。

「ま、まさかお前、チンピラ狩りの美川^{ミカワ}か！？」

真つ白髪の男が私に問いかけてきた。

……私も随分と有名になったものだ。苗字を知られているなんて。それにしても？チンピラ狩り？と呼ばれているとは……。まあ、似たようなことはしていたかもしれない。

「チンピラ狩りだあ？」

金髪は知らないらしい。そりやそうだ、本人の私ですら今初めて知ったんだ。

「知らないんですか御頭！　今まで数々のチンピラを警察送りにしてきた女ですよ！　特徴は赤い長髪に翠の眼、赤いバンダナと腰につけた短剣らしいです！　裏ではかなり噂になってます！」

銀髪の男が焦って金髪に説明している。

「多分、それは間違いなく私だろう」

『ぬぁにいいいいいい！？』

金髪以外が驚く。

「フン！　チンピラ狩りなんぞ俺たちの敵じゃあない。こっちは全員ナイフを所持しているからな」

あ、これは拙い^{ズス}ことになってしまったかもしれないかもし

れない。一人なら余裕だが全員となると私でも勝てる気がしない。
ここは逃げるか否か。逃げれば私の人道に反する。闘えば死ぬ（
かもしれない）。

嫌、待てよ？ 相手がナイフの扱いが下手であれば私にも勝機が
あるかもしれないぞ？

……よし、少し闘ってみてもしナイフの扱いが上手かったら逃げ
るでしょう。何もしないよりはマシだろうしな。

私は構えた。

「……かかってこい」

「随分と舐められたものだっ！」

金髪は切れた。右手で私に殴りかかる。

「甘い」

私はそれを受け止め、金髪を投げ飛ばした。

投げ飛ばされた金髪は普通に痛がつている。いい気味だな。だが、
こんな程度で痛がつていてはいけないと私は思う。

「この小娘、よくも御頭を！」

でこピアスの蹴りを難なく避ける。でこピアスは私の後ろのコン
クリートの壁に頭を打ち付けて気絶した。

このでこピアス面白いぞ。コンクリ壁に漫画のような効果音で頭
を打ち付けるとは。私に蹴りを入れようとした筈なのに頭からぶつ
かるのは凄い。

「……待てよ？ ここでチンピラ狩りの美川を殺せば、俺たちはチ
ンピラの中のチンピラってことになるよな！？」

銀髪が思いついたように言った。私は殺されること前提かこの野
郎。

「そうなればオレたちの名は全国に知れ渡ることになる！ 全国の
チンピラを従うことができるんだ！」

「おおっ！」

茶髪が歓声を上げた。

「というわけで美川！ 死んでもらうぞ！」

茶髪は私の方を向き、ナイフの刃を向けて走ってくる。

正面突破か。面白い。こんな奴は初めてだ。

私はそれを避け、奴の右腕をつかんだ。そして力を入れる。

「いだだだだだだだっ!!」

茶髪が涙目になっている。

ほう………こんなのが痛いのか。私はまだ本気の50%も出しては
いないが。

ゲキッ

右腕の関節をを曲がらない方向に曲げてみる。

「ぎゃああああああああつ!!」

と叫び声をあげ、茶髪はだらんとうなだれた。気絶か。

残りは白髪、銀髪、金髪の3人だな。茶髪はナイフの使い方が下手糞すぎた。楽しくない。

「チンピラの中のチンピラを目指して！ お前ら、一斉攻撃だ！」

『ラジャー了解御頭!』

金髪の言葉に、白髪は右で、銀髪は左で殴りかかってきた。

「私は甘い食べ物より辛い食べ物の方が好きだが」

そう言っただけ息をつき、それぞれの腕を受け止めてから腕をねじった。そして、男の急所というものを思い切り蹴る。

『○#? * ? !!???』

二人は言葉にならない言葉を放ち、倒れた。

「急所を打つのに抵抗はないのか？」

金髪が顔を引き攣らせて私に訊ねる。もちろん私はすまし顔で、

「勿論だ」

と答えてやった。

「抵抗があつたら今までチンピラを倒すことは出来ていなかったと思っぞ」

「……フ…フフフ……」

金髪は突然笑い出した。

「どうした？ 気でも狂ったか？」

「ここでお前を殺すのは惜しい。チンピラ狩りの美川とか言ったよな？ お前、俺たちの仲間にならないか？」

「……………はあ？」

私はいつになく間抜けな声をあげた。

チンピラの仲間には誘われた？ このチンピラ狩りと言われる私が？ 仲間になるくらいならとづくに誰かについてるに決まってるだろ。二度目だし。流石に二度も誘われるとは思わなかった。

「断る。そんなことをしたら私の人道に反するからな」

「そう言うと思った」

胸の前で腕を組み、威張り、私をどんどん苛々させる金髪。

「どういうことだ」

眉間にしわを寄せ、私は金髪に訊ねた。

「これは時間稼ぎにしか過ぎなかったということさ」

「っ！？ 時間稼ぎだと！？」

私が驚いた瞬間、心臓付近に刃物が刺さったような痛みにも襲われ、前のめりに倒れこんだ。

「な…何を…………」

「おれっちが準備を整えるための時間稼ぎだよ、お譲ちゃん」

この声は確かあのでこピラス…………やられた。

「正面突破では勝てそうになかったからな」

「それよりも御頭！ おれっちらはこれからチンピラの中のチンピラですぜ！」

「嗚呼。そうだな」

私をこんな状態にして、喜んでいる金髪と黒髪。こいつら、絶対にこのままじゃ済まさん。

私は、ウエストポーチから短剣を取り出し、金髪の左足のズボンのすそに思いつき差し込んでやった。足にぶっ刺すつもりだったが外してしまった。だが、かなり深く刺さった筈だ。

「っ！？」 この小娘^{ガキ}っ、俺が愛用しているズボンに穴を開けやがっ

た！」

金髪は相当怒っている。

「そん…なに大事…なら、着て…くんな…よ……」

私の意識は、そこで途絶えた。

フ……とうとう死ぬのか、私……。

目が覚めるとそこは、ほとんど何もない真っ白な空間だった。そんな中で、私は何か軟らかいものにもたれかかっている。この軟らかいものは低反発枕……ではないだろう。流石に。じゃあ何だ……？
「もしかして起きちゃった？」

真上から聞こえる大人の女性ののような甘い声。上を向くと、真ん前に女性の顔があった。

「うわあああああつ！？」

私は急いでその女性から離れる。金髪碧眼の美女だ。白い服を着て、まるで天使のような神様ののようなオーラをかもしだしている。
「言うかあの人胸でかつ！？」

「あら、そんなに引かなくてもいいじゃない。チンピラ狩りの美川ミカワカオル香さん」

女性は子供っぽくウインクをする。

「何で私の本名フルネームを知ってるんだ！？ 何で？チンピラ狩り？の異名を知ってるんだ！？ そしてここは何処であんたは誰だ！？」

異名を知っているということはこの人も裏チンピラの人間か！？

「ちよつとお、そんな一気に質問しないでよ。わたし神様とはいえ聖徳太子じゃないんだから、一気に十人もの声を聞き分けるなんてこと出来ないわ」

私がたくさんの質問を投げかけたのに対し、女性は子供のように膨れっ面になる。……え？

「今、神様って言った？」

「そうよ。わたしは神様なの。よろしくねっ」
「いや神様、？　？　じゃないだろ、？　？　じゃ。」

「それじゃあ、香の質問に答えさせてもらっわね。」

さつきも言ったとおり、わたしは神様。だから、あなたの本名も知ってるの。異名を知ってるのも同じ理由。
フルネーム

で、ここがどこかって話だけど、ここは死後の世界の一步手前よ。普通の死者がこれる場所じゃないのよ。つまり、あなたは普通の死者じゃないってコ・ト」

神様が私に解りやすい説明をしてくれる。今の言葉で、本当に私死んだんだなと改めて今実感した。

「何で私は普通の死者ではないんだ？」

「それはね香、わたしがあなたに感謝してるからよ」

「……はい？」

神様が感謝？　私なんかに？

私、何か神様に感謝されるようなことをしただろうか？

「意味が解らん」

今ふと思った。相手は神様なのだから、ここは敬意を払った方がいいのだろうか。

「そりゃ解らないでしょうね。ちゃんと教えてあげるに決まってるでしょ。」

香はたくさんチンピラたちを警察送りにしてくれたじゃない。

そのおかげでチンピラに殺される人が減って、使者を送る仕事が減ったのよ。だから、感謝してるの。解った？」

仕事が減って嬉しいのかこの神様。まあ神様は面倒だろうが……。
「じゃあ何で神様なんてやってるんだ」

私はため息をついた。

「わたしの家は代々神様なの」

「神様にも家があるんだな」

「ええ」

面白くて思わず表情が緩んでしまいそうだ。

「さあて香。あなたはそのまま死にたい？ それとも転生したい？」
突然こんな質問をする神様。

「……できることなら転生したいが、そんなこと出来るのか？」

「わたしは神様よ？ そんなことは朝飯前。じゃあ、早速転生の手続きを始めるわね」

そう言って神様は何処から取り出したノートパソコンを開いた。
「……って、どう考えても行動が早すぎだろ！」

「？善は急げ？って言うじゃない。」

あ、そうそう。転生先と転生後の年・性別・服・年齢はわたしが決めておくから、新しい名前を考えておいて。男になっても女になってもいいような名前ね」

カタカタとキーボードを打つ音。神様、タイピング結構早いんだな。もしかすると私より早いかもしれない。

と、いろいろ考えるのはいったん止めにして、名前を考えるか。せめて性別さえ教えてくれれば考えやすいんだけど……。

「決めた？」

「まだ一分も経ってねえよっ！」

思わず突っ込みを入れる。

「丁度一分よ。早く決めて。何なら、わたしが決めてあげてもいいけど？」

「遠慮しておく」

名前……名前……か……。

「……刹那翠」

「オッケー。じゃあ、転生後はその名前で名乗ってね」

「嗚呼」

私は頷いた。

「そっいえば、何で翠なの？」
神様が私に訊ねる。

「……目の色が、翠だからだ」

「フツ、単純ね」

多分今、私の顔は林檎や柘榴よりも、髪の色よりも赤い。

「でも、それなら髪の色に関係する名前でもよかったんじゃない？」

「何といつても私はネーミングセンスがないからな。考え込むとど
んどん変な名前になっていくから、すぐに思いついた名前にしたん
だ」

私の言葉に神様は笑った。

「それじゃあ。」

チチンパイパイ、転生の扉よ出てこおい！」

ブォン

漫画のような凄い効果音がして、私の目の前に筆で？馬鹿万歳？
と書かれた扉が現れた。

「何故に？馬鹿万歳？」

「気にしなくていいのよ。あ、そうそう。転生後の性別とかいろいろ
確認するわよ。」

名前は刹那翠。性別は男。転生は13年後、中学の入学式一時間
前。大手企業社長の一人息子。現在は忙しい親の変わりに育ててく
れた叔母の家に住んでる。髪の色は赤、目の色は翠。これでいいわ
ね？」

神様はパソコンに書いてあることを読み上げた。

「……ちよつとマテ。何で私は転生後が男になってるんだ」

「気にしなーいのっ」

嫌な予感しかしない……。

「それじゃあ、扉を開いて新しい世界で頑張つてね。？チンピラ狩
り？は……好きにしていいいわ。継続してもいいし、止めてもいい。
わたしは継続してほしいけど。行ってらっしゃーい」

私が扉を開けると、そこは崖のようになっていた。私は
そこに飛び込んだ。

……？チンピラ狩り？は…どうしようか。また転生前と同じようになる可能性もあるから止めておこうかな。

どーせ短剣もバンダナもなくなってるだろうし。

私は目を開けた。

「翠ー！ 早く起きてー！ 入学式でしょうー!?」

……あ、そうか。私は転生したのか。ここは確か……叔母の家、だったかな。

ていうか何かいろいろ違和感感じるぞ。主に股間の間。…本当に男になったんだな、と実感する私。

とりあえず起き上がってベッドの上から降りる。なんだか少し視線が高くなった気がした。

「翠、いつまでグズグズしてるの！ 遅れるわよ!」

多分この声は叔母だ。じゃあしょうがない、制服着るか。

「……これかな」

私はその辺にかけてある制服らしきものを手に取り、着てみる。サイズもぴったりだ。

そして、部屋を出た。右は階段、左は長い廊下。右に曲がり、階段を使つて一階に降りる。

「ようやく降りてきたね翠。ほら、早くご飯食べなさい」

笑顔で私に話しかける女性。髪を後ろで一つ結びにしていた。叔母とはきっとこの人のことだろう。

一応私にとっては初対面だ。敬語を使っておくか。

「はい」

そう言つて私はテーブルの席に着く。ご飯に茄子の味噌汁、玉子焼きと、一般的な朝ごはん。

「いただきます」

「それにしても翠、やっぱりその制服似合うねえ」

「そうですか？」

玉子焼きを一口に放り入れる。……甘いのに旨い。

「嗚呼！ 美代子^{ミヨコ}が見たら似合うつて言っに決まってるさ。この叔母さんが言っんだから信じな！」

母親の名は刹那^{セリナ} 美代子^{ミヨコ}と言っらしい。あと、叔母は母親の一つ上の姉^{アネ}だそうだ。

「学校もちよつと遠いけど、自転車があれば10分しかかからないし。よかったねえ翠」

「はい。あ、叔母さん、この玉子焼きおいしいです」

「そうかい！ それはよかった」

叔母は満足そうに笑った。

これからこの世界での生活が始まるんだ。

一問目

「翠、話があるわ」

海の家の掃除中、突然叔母が私に話しかける。

「どうしたんですか叔母さん」

「アンタも高校生なんだから、一人暮らしをしたっていい年なんだよ」

え……？

「どういう意味ですか……？」

「したいときは一人暮らししていいってことさ！ こっちは少し寂しくなるけど、きっと大丈夫。一人暮らししたいときはいつでも言いな？ あたしが手配してやるから」

叔母さん……。

「……ありがとうございます……っ」

私は叔母の言葉に泣きそうになりながら、お礼を言った。

自分で言うのもなんだが、転生してから私は少し性格が丸くなった気がする。この人に育ててもらって、久しぶりに感謝というのを思い出すことができた。

……あ、現在私は15才だ。転生して4年目になる。つまり、高校一年生。

転生前も楽しかったが、今も楽しい。勉強したり、勉強したり、勉強したり……こっちの世界はかなり勉強に集中できるんだ。…まあ、高校に入学してからは出来なくなったけど。

なんつーか私、今……虐め？ ってのを受けてる。別に振り返ちにしてもいいが、また？ チンピラ狩り？ みたいなあだ名を付けられたくはない。面倒だ。

あ、あと入学式が終わって部屋に戻ったときに気づいたんだが、神様から短剣とバンダナとウエストポーチが贈られていた。前世で

使ってたやつそのものを。最期にあの金髪のスボンの裾にぶっ指した筈だったが、別に気にしてはいない。この短剣はお気に入りだからな。

さて、さつき叔母が言ってた一人暮らし。実は丁度私も叔母に相談しようと思っていたところだ。許可してくれたときの行き先も決めている。話してみるか。

「…叔母さん」

私は叔母に話しかけた。

「なんだい？」

「実は私、一人暮らしのこと考えてたんです。でも言い出すタイミングが掴めなくて……」

叔母は私の言葉に驚いていた。

「そうだったのかい。なら早く言ってくればよかったのに。じれったいねえ」

驚いてはいたが、どこか喜んでいるようにも見える。

「それで、行きたい学校とか、決めてるのかい？」

私は頷いた。

ふみつき

「文月学園がいいと思ってます」

「召喚獣やらなんやらかんやらがあるあの学園か！ あそこならあたしも賛成するよ！ いろいろややこしいけど、翠の為になると思うからねえ！」

「本当ですか！？」

この叔母の言葉はとても嬉しかった。まさか、許してもらえると夢にも思っていなかったから。

「じゃあいっぱい勉強しなきゃね！」

「はい！ 頑張ります！」

というわけで。

私は一ヶ月間、勉強のみに励むことにした。

高校に行っても休み時間は図書館で勉強する（だって図書館なら静かだし。騒いでたらつまみ出される）。

何故勉強に励むことを決めたのか？

それは、？クラス振り分け試験？というものが文月学園には存在するからだ。私はぜつつつつつたいにFクラスにだけは逝きたくない。漢字はきつと……いや、絶対に違わない。

図書館通いを初めてから四週間が経った。やっぱり図書館は静かで勉強に集中しやすい。

「セーツナ君」

後ろから声がした気がしたがきつと空耳だろう。

「無視すんなよ刹那翠」

「たたく、今日は空耳がよく聞こえるな。集中が切れる。」

「兄貴い、刹那^{コイツ}意地でも無視し続けるつもりっす」

「なら無視できないようにしてやればいいだろ？」

「流石兄貴だ！」

後ろでごちゃごちゃと五月蠅いなこいつら。殴りたい。

と思っていると、私が座っている席の隣に黒い長髪のナルシストが座った。

「刹那、何やってんだ？ 勉強か？」

ナルシストは私の勉強の邪魔をしようとしているようだ。勿論無視は継続。

「いい子ちゃんは大変だなあ。成績を維持しようと頑張ってるのかあ」

もう片側に、黒髪のショートヘアが座る。その言葉と同時に、真ん前には茶髪の坊主が座った。

「刹那は誰にも首席の座を奪われたくないから勉強してるんすよね」

え？」

「……こいつらウザい。」

私は席を立ち、図書館を出た。多分あいつらはこれを誘っていたのだろうが、あえて乗ってみる。

「かかったな刹那！」

いつの間にか茶髪坊主に待ち伏せされていた。

「笹本、刹那を羽交い締めしろ」

「了解す！」

茶髪坊主は私を羽交い締めする。と、ナルシストが私の鳩尾を殴った。少し痒いくらいだが、気絶をしたフリをしておこう。

私はショートヘアに担がれた。どこに連れていくつもりだよこいつら。

私が担がれて来た場所は校舎裏。またか。まったく、こいつらは懲りないな。

「兄貴。刹那コイツどうします？」

ドサッ

その辺に放り投げられる。

「目が覚めないうちに殺りたい。だから、今のうちに磨いでおくのが一番だろう」

『了解（っす）！』

そう言ってショートヘアと坊主が鞆の中から取り出したのは……ナイフだった。前世で私を殺したナイフにそっくりだ。

三人は座り込んでナイフを研ぎ始める。

「それにしても兄貴。こんなカッコイイナイフ、どこで購入してきたんですか？」

「ネットだな。オレはあまり信じてないが、17年前に異世界で？チンピラ狩り？を殺したナイフだそうだ」

っ！？ 何…だと……！？

「へえ、？チンピラ狩り？を殺したナイフっすか」

「面白そうだったから購入してみたんだ」

「……それは本当か？」

私は思わず声を出してしまう。

「起きてたのか。いつからだ？」

「最初からだ。私の質問に答える」

「やだね」

……このナルシスト、本気で殺ってやろうか。

「兄貴。どうします？ おいらは研ぎ終わったっすよ？」

「じゃああの刹那を弱らせておけ」

「了解っす」

坊主が右手にナイフを持って私に向かってきた。

「……甘すぎるな」

私は坊主の右手首を掴んだ。

「ナイフの扱い方が下手すぎる」

「んなっ!？」

そして、投げ飛ばした。

「何で茶髪はこんなにナイフの扱いが下手なんだ。……その程度の
実力で私を殺ろうとは、いい度胸だな」

私は勉強道具を入れていた鞆から短剣が入ったケースを腰に取り
付ける。こんなこともあるつかとケースを改造してた甲斐があった
な。短剣が入ったケースと一緒に愛用のバンダナも取り出した。

「それは!？」

「お前たちが知る必要はない。……？ チンピラ狩り？ の異名は伊達
じゃないことを教えてやる」

髪を結びながら私は言う。男になってからも髪が長いから邪魔だ。
切ればいい話だがすぐ伸びて面倒すぎる。結び終わったあとはその
上からバンダナを付けた。

「さあ、宴の始まりだ」

「舐めるなこの細腕!」

坊主がもう一度右手にナイフを持って私に向かってくる。

「無駄だ」

カキンッ！

私は一瞬で短剣を取り出し、それでナイフを受け止めた。

「刹那もナイフ所持かっ！？」

「ナイフではない。短剣だ」

誰が何と言おうとナイフではない。短剣だ。

私は坊主を弾き飛ばす。

「っ……強……」

ショートヘアが啞然としている。

…… やっちまったな、私。短剣だけはなるべく使わないように気を付けていたのに。

「兄貴い！ 刹那かなり闘い慣れてるっす！！」

「み……みたいだな……」

流石のナルシストもたじろいでいた。

「だが！ オレたちは刹那アイツなんかよりずっと強い！ オレが相手をする！」

『よっ、兄貴！』

はあ…… ナルシストがきた……。

「おい刹那。お前、？チンピラ狩り？を知っているようだな」

ナルシストが戦場に出てからの第一声がそれだった。

「嗚呼。よく知っている」

何せ本人だからな。知らない方がおかしい。

「どんなやつなんだ？ 知ってるなら解るだろう」

ナルシストはゆっくり私に近づいてきた。

「柔道・剣道・弓道・少林寺を完璧に身に付けていた女子高生だ」

自分のことをこんな風に言うときが来るとは思わなかった。とりあえず威圧感だけは伝えておくでしょう。

「女……だとっ……！？」

ナルシストは驚いている。

「嘘をつくな!!」

「俺は基本嘘なんぞつかん」

ついてはいけない嘘は、な。つかなければならぬ嘘だつたら当
ついた気がする。

「……？チンピラ狩り？の……その女の本名と……殺された時刻は？」
フルネーム

「名前は美川 香。20XX年6月29日15時37分、阿呆なチ
ンピラに後ろから心臓付近にナイフを突き刺されて殺された」

「お前……随分と詳しいんだな。何故だ？」

あー、もういいや。隠すの面倒くさいし言っちゃえ。

「当たり前だ。本人だからな」

三人は目を見開いた。フ、驚いたかこの阿呆どもめが。

「さつき？チンピラ狩り？は女だと言ったばかりだろ!？」

と坊主。驚くのはそこなのか。死んだのにどうして今ここにいる
のかとか、そういうのじゃないんだな。

「お前たちバカにでも解るように説明するとなると難しい。が、私
は？チンピラ狩り？の生まれ変わり……？とも言うておこうか」

とりあえずこう言うておくことにする。

「あと、このバンダナと短剣は当時のものだ」

「そんな……ことが……ありえるのか……!？」

ナルシストはペタンと両膝と両手をついた。

「残念ながらありえるんだ。……さて」

私は体制を低くした。

「選択させてやろうか。四分の三死ぬか？ 五分の四死ぬか？」

『で、できれば百分の一でお願いしますっ!!』

アホトリオ
阿呆三人組は脅えていた。

まあ確かにあの選択でどちらかを選ぶバカはいないよな。流石に。

「……仕方がない」

とりあえずナルシストには右頬に、ショートヘアには右腕に、坊
主には左足に軽い切り傷をつけ、短剣を閉まった。そしてバンダナ
を取り、結んでいた髪もほどく。

「次はないと思え」

鋭く睨み付け、私はその場を去った。

すまん神様。私、阿呆なチンピラどもに正体言っちゃったわ。

そんで次の日の昼休み。

「刹那君」

図書館に行こうとしたら、担任に呼び止められた。

「…何ですか？」

「今すぐ職員室に来てください。お伝えしたいことがあります」
教室はざわつき始めた。

いつもとは違い、かなり深刻な顔をしている。だからわざとふざけたくなるんだよな。

「そつえば、何かがあれば必ず職員室に呼び出されますよね。何ですか？」

担任はため息をつき、

「流石にクラスメートには聞かれたくないでしょう？ 自分が停学処分になったことなんて」

と呆れているように私に言った。

「……先生、今、私が、停学、処分、と、言いま、したか？」

「はい。原因は昨日喜村君と起こしたトラブルです。まさか私も刹那君が短剣を所持しているとは思いませんでしたよ」

「えっ？」

「馬路かよ」

「そんなっ」

「本当だったらあちしファンクラブ抜けるっ！」

ざわめきが大きくなる。最後おかしいな発言があったのは空耳だと思っておこう。

「……何の話でしょうか」

とりあえずしらばっくれておくことにした。話すの面倒くさいし。
「昨日、隣のクラスの喜村君が？刹那に殺されると思った？と言って騒いでいたんですよ」

「何かの間違いですよきっと。」

大体、喜村に殺されかけたのは俺の方でしたから。あいつらナイフ隠し持ってたし。自分等のナイフで切ったかどうかのガラスで切ったんじゃないですか？」

半分事実、半分嘘。生き残るには嘘も大事だと、転生前叔父に教えられた……記憶がある。

「……まったく、刹那君はいつも真顔なので何が嘘で何が本当か解りませんね」

私は本日二度目となる担任のため息を目撃してしまった。

「とにかくこれは決定事項です。刹那君、明日から一週間の停学処分を言い渡します」

あゝあ。人生初の停学処分か。前世では相当のチンピラを警察送りにしていたのに、一度も停学処分を受けたことがなかった。そのほうが不思議だけど。

まあ、しゃーない。あと六日間、勉強に励むか。そのあとは海の家の手伝いをしよう。私も暇だし叔母たちも忙しそうだし。

停学処分のことを叔母に話すと、いつになく悲しそうな顔をした。叔母が無理矢理笑顔を作り、「部屋に戻って勉強に集中しなさい」と言われたときは、私も胸が痛かった。

部屋に戻ってから、私は後悔していた。何であんなことをしてしまったんだと。身の危険に晒されているのならば逃げればよかった筈だ。そうすれば停学処分にもならなかったし、叔父や叔母をそんなに悲しませることはなかった。

私があんな行動をとってしまったのは、多分私の中のプライドと自分の人道が騒いだから。余計なプライドによって私はあんなことをしてしまった。余計な人道によって私はあんなことをしてしまった。

……今更後悔しても遅いな。勉強に集中するしかない。集中しよう。

私は、学校で使用しているルーズリーフを乱暴に取り出した。

二 問目（前書き）

短いです

二 問目

停学処分を言い渡された日から六日が経った。この六日間、勉強と海の家の手伝いしかしていない気がするといつか絶対にそれしかしてない。……まあ飯食ったりとかの日常茶飯事はしたが。

「ふう……」

そして19:27分現在、私は部屋で珈琲コーヒーを飲みながら寛いでいる。この時間に珈琲を飲めば寝れなくなってしまうが、時間は無駄にしない。振り分け試験前の下調べに使う。

「完璧だ」

自分にしか聞こえないくらいの声で私は呟いた。私が熱さえ出さなければ、狂いのない完璧な計画。

珈琲を飲み終わり、コップを机の上に置き、机の椅子に座り直し、お気に入りのシャーペンを手取る。そして大学ノートを開き、そのページの一番上にこう書いた。

「文月学園振り分け試験 最終調整ページ」

次の日の朝。目が覚めた私は、急いで白黒(3:2)の長Tと紺色のジーパンに着替え、靴下を履いて一階に降りた。

「叔母さんおはようございます」

「おはよう翠。早くご飯食べな。今日は絶対に遅刻できないんだろっ?」

私は黙って頷き、食卓につく。目の前には、

「……何でオムライスなんですか?」

何故か真っ直ぐなケチャップで綺麗に飾られた夕食向きなオムラ

イスが置かれていた。

「本当は卵焼きを作ろうと思ったんだけどね、フライパンの形を間違えちゃったんだよ」

その言葉で私は納得する。確かに叔母ならなくもなさそうな間違いだ。でも形を間違えたくらいでオムライスに変えようと思える叔母がすごいと思う。

「いただきます」

数分後。私は珈琲を飲みながら数学の教科書を読んでいた。夜中に最終調整をしようとは思ったのだが結局途中で寝てしまったんだ（；ー；）……仕方ないだろう、私は夜が苦手なんだから。珈琲を飲んでも徹夜まではできん。

「翠、時間大丈夫かい？」

叔母にそう言われて時計を見る。06:13だ。

「あー……はい。もうそろそろ出ます」

私は英語の教科書を閉じ、テーブルの上に置く。表紙の落書きがよく目立つ。あのナルシストがやったのだろう。幼稚な嫌がらせだ。気にしてないが。

こんな時間にでるなんて早すぎる、と言いたいやつがいるだろうから説明してやろう。

クラス振り分け試験が始まるのは08:00。ここから文月学園に行くには一時間半かかる。バス停まで五分、バスで三十分、そこから電車の駅まで五分、電車で三十分、そして駅から文月学園までが二十分。……勿論徒歩だ。徒歩以外に何があると言う。

私はジャケットをはおり、靴を履いた。

「いつてきます」

そして、鞆を左手に家を出た。

07:25。バスや電車での長い旅の末、ようやく文月学園がある都市に到着した。バスは酔うかと思った。死にそうなくらい気持ちが悪かった。

そして現在の時刻は07:35。四つ角を左に曲がる。

「よし明久あきひさ、テスト前の小手調べだ！」

と、前の方に二人の男子高校生を発見した。文月学園の生徒だろうか。

「？三権分立？は？司法？と？立法？ともう一つは何で成り立つか？」

身長が高く髪型が赤いたてがみのような奴が明久と言われる茶髪の子ビに問題を出題した。……なんて簡単な問題なのだろうか。答えは？行政？だな。

「ふ……あまり僕を見くびらないでくれよ雄二ゆじ……。……二つまでなら絞れる」

明久という茶髪が訳のわからないことを言う。二つ……？

「ほっ」

「？憲法？か？漢方？のどっちかだったはず……」

ここにも茶髪の阿呆がいたようだ。

「……？行政？だ」

雄二と呼ばれるたてがみ野郎は呆れたような声で正解を告げる。

呆れるのも無理はないと思う。

「あ、それじゃウチからもー！」

元気のよさそうな女子高生が横を通り過ぎて行った。そして二人の後ろで止まり、

「では基礎問題！　？CH₃COOH？とは何でしょう？」

と科学の問題を出題する。二人は後ろを向いた。……基礎がわからんとは最悪だな私。家に帰ったら復習するか。

「……………」

茶髪は黙り込む。と思いきやクルッと進行方向を振り向き、

「吉井？」

「……………英語は苦手なんだ」

「え…………？　これ英語じゃなくて科学」

「じゃあ僕こつちだから！」

と言つて走り去つていった。科学を英語と間違えるとは相当の馬鹿だな。

「ちょ、ちよつと吉井！　アンタ相当ヤバイんじゃない？」

女子高生はその後を追う。

赤髪や女子高生はともかく、あの茶髪はFクラス逝き確定だろう。十問に一門は解けるとか言つてそつだ。

「おいお前」

む？

「私のことか？」

「お前以外に誰がいるんだ」

言われてみればそつだつた。まわりには誰もいない。

「あいつ、どこに入と思う？」

きつとあいつというのはあの茶髪のこと、どこというのはクラスのことだろう。赤髪の質問に私は、

「F」

と歩きながらも即答してやつた。

「お前もそう思うか。そつだよな。誰がどう見ようとそつだよな。

……………で、お前誰だ？　見かけない顔だな」

今更かよ。このたてがみ野郎も相当の馬鹿だ。FはなかったとしてもEか？

「私は刹那翠だ。春から文月学園に転入することになった。一応振り分け試験も受けさせてもらうことになっている」

「そうか。俺は坂本雄二だ。よろしくな刹那」

たてがみ野郎は坂本と言つらしい。

「嗚呼。よろしく」

こつ言つことしかできなかった。

「ところで刹那」

「翠でいい」

「なら翠、何で文月学園に転入しようと思ったんだ？」

坂本は突然こんなことを質問してきた。

「……ししやうせんそう 試召戦争」

「ふーん」

おい坂本。質問しといてそれかこの野郎。

「あ、やべ。ゆっくりしてる暇ねえなんだった。じゃあな翠！ 試験
頑張れよ！！」

そう言い残し、坂本は走っていった。

なんだあいつ。自分から話し掛けてきたくせに自分から会話を終わらせやがった。おかげで私が自由に使える時間が減ってしまったではないか。

……私も急ぐとするか。

五時間後。まさかこんなに時間が掛かるとは思わなかった。せいぜい四時間程度だろうと思っていた私が甘かったようだ。

「はあ……」

誰かとともにため息をつく。坂本ではなさそうだ。

「お主も疲れたのか？」

爺言葉で話しかけてくる誰か。この男子生徒だろう。

「そりゃ五時間ぶっ続けでテストは疲れるだろ。何で休憩させてくれないんだ」

不満しかない。

「仕方がないであろう。それがここなんじゃ。ところでお主誰じゃ？ 見かけぬ顔じゃのう」

誰かこの学園の奴等に自己紹介を教えてやってくれないだろうか。

「刹那翠だ。翠でいい」

「そうか。ワシは木下秀吉きのしたひでよしじゃ。秀吉と呼んでくれ。よろしく頼むぞい」

そう言って私に微笑みかける秀吉。

「嗚呼。春からよろしくな秀吉」

この時私は、生まれて初めて男子の同級生を下の名前で呼んだ（勿論前世含む）。

帰宅後、私はソファに頭から飛び込んだ。眠くて仕方がない。

……が、ここで寝てしまっではいけないことくらい分かっている。ちゃんと部屋の鍵を閉めてベッドで寝なければ。

「翠、アンタに電話だよ」

叔母が私に電話を差し出す。誰だ？ 家の電話番号は学校しか知らなかった筈だが。

「……代わりました、翠です」

『今海の家の前に』ブツッ

一刻も早く部屋に戻った方がよさそうだ。

三問目

あれから数週間が経ち、転生してから5回目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っている。私は花を愛でるほど雅な人間ではないのだが、その眺めには一瞬目を奪われる。

しかし、それも一瞬のことに過ぎない。私は今、茶髪の馬鹿を右手で掴んで、初日から遅刻と言う最悪なシナリオを走り抜けようとしていた。

ことの始まりは数分前に遡る。

「ねっ、寝坊したあっ！」

私は時計を見てベッドから飛び降りた。ここから文月学園までは走っても五分かかる。しかし起きたのは丁度HR^{ホームルーム}六分前。マトモに飯を食う時間もない。

制服に着替え寝癖で跳ねた髪を整えたあと、炊飯器を開けて手に塩をつけてからご飯を握る。これで塩握りの完成。握り飯は一個数秒でできるから急いでいるときに便利だ。出来上がった握り飯を口に頬張る。

そのまま鞆を手に取り、家を出た。

右に曲がって走り出そうとすると、

「うわあっ!?!」

「痛っ!?!」

誰かとぶつかった。

「いったたた……ちよつと! ちゃんと前見て歩いてよ!」

キレられた。当たり前だが。

「悪い、遅刻しそうで急いでたんだ」

立ち上がって制服についた砂をはたき落とす。相手は文月学園の生徒らしい。制服が同じだ。

「えっ、君も遅刻なの？」

「……お前も遅刻か。なら急げ！」

私は相手の手首を掴み、走り出した。

そのまま私は今も走り続けているというわけだ。

「吉井、刹那、遅刻だぞ」

玄関を走り抜けようとしていた私は、玄関の前でドスのきいた声に呼び止められ足を止める。声のした方を見ると、そこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。吉井？ 吉井ってどこかで聞いたような……。

「あ、鉄じ じゃなくて、西村先生。おはようございます」

茶髪の馬鹿（もう吉井でいいや）が軽く頭を下げて生活指導の西村教諭に挨拶をする。試験のときは色々とお世話になった。

「今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ」

「ん、そうか？」

「気のせいじゃないですよ西村先生。遅刻してすみません」

それにしても、鉄人とはなんのことだろう。西村先生の渾名か？ 「刹那」は吉井に比べてまともだな。『おはようございます』があれば完璧だが」

吉井と比べられたくはなかった。

「あ、すみません。えーっと 今日肌が黒いですね」

「……お前には遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか？」

「そつちでしたか。すみません」

「まったくお前というヤツは……いくら罰を与えても全然懲りないな」

溜め息混じりに先生がつぶやく。吉井は遅刻の常習犯

「先生。僕は、遅刻はあまりしてないですよ？」

ではないようだ。

「遅刻は、な。ほら、二人とも受け取れ」

先生が箱から封筒を取り出し、それぞれ私たちに差し出してくる。宛名の欄には『吉井明久』、『刹那翠』と大きく名前が書いてあった。嗚呼、吉井は？行政？もわからなかったあの馬鹿だったな。吉井を馬鹿というと吉井家に失礼だから明久でいいか。

「あ、どーもです」

「ありがとうございます」

頭を下げながら受け取る。

「それにしても、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表してるんですか？ 掲示板とかで大きく張り出しちゃえばいいのに」
確かにそうだ。こうやっていちいち全員に所属クラスを書いた紙を渡すなんて、面倒なだけだろう。丁寧に一枚一枚封筒に入れてあるし。

「普段はそうするんだけどな。まあ、ウチは世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験校だからな。この変わったやり方もその一貫ってワケだ」

「そついつもんすか」

適当な相槌を打ちながら封に手をかける。さてと。私はどのクラスになったのだろうか。少し緊張するな。

そう言えば私は、ずっとFクラスは絶対に嫌だといっておきながら一度も説明をしたことがなかったな。一応説明しよう。

私がこれから通うことになる文月学園はクラスがAからFまであり、二年生以上はAから順に振り分け試験の成績順でクラスが決まっていく。頭のいいヤツはAクラス、悪いヤツはFクラス、といっ

た具合だ。つまり所属しているクラスだけで頭の良し悪しがわかってしまう。個人的に馬鹿しかないFクラスだけは避けたい。それ以外だったらどこでもいい。

「刹那。お前は本当に勿体無いミスをしたな。そのミスさえなければ良くてAクラス上位、悪くても下位になれた筈だったんだが」

思ったより頑固に糊付けされていて、封筒がうまく開かない。仕方ない、上を少し破くか。

ピツと軽い音を立てて封を切る。中を除くと、そこには一枚の紙が入っていた。

とてつもなく嫌な予感がする。

「まさかお前が」

折り畳まれた紙を開き、書かれているクラスを確認する。

『刹那翠……Fクラス』

「名前記入欄に一問目の答えを書くとは思ってもいなかったぞ」
こうして私の最低クラス生活が幕を開けた。

明久がどのクラスかは 聞かなくてもわかることだ。

四問目（前書き）

【第一問】

問 以下の問いに答えなさい

『調理のために火にかける鍋を製作する祭、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。』

姫路瑞希の答え

『問題点：マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例：ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目と言う引っかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけありませんでしたね。

土屋康太・刹那翠の答え

『問題点：ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例：未来合金（　すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

四問目

「はあ……」

気持ちが悪く落ち込んだまま一段一段階段を上がっていく。

「溜め息つきすぎだよ。えーっと……」

「刹那翠だ。翠でいい」

何故覚えてないんだこいつは。まあ名乗ってないのは私なのだが。

「そうそう、翠だったよね。あ、僕は吉井」

「明久^{バカ}だろ」

「やめて！ 明久と書いてバカと読むのはやめて！！」

「じゃあ吉井明久^{バカ}」

「明らかにそっちの方が酷いよね！？」

仕方ない。ちゃんと呼んでやるか。

「安心しろ明久。半分は冗談だ」

「残りの半分は！？」

そんな会話をしているうちに三階へと足を踏み入れた。まず目の前に現れたのは通常の五・六倍はあるつかと言う広さを持つ教室だった。

「……なんだろう、このバカデカイ教室は」

明久も驚いているようだ。

「ここがAクラスだろうか。」

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの二年A組の担任、高橋洋子です。よろしく願います」

足を止めて大きめの窓から中を覗いてみると、髪を後ろで団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツをきっちり着こなした知的女性の代表のような教師がいた。

彼女が告げると、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイに担任教師の名前が表示された。

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他の設備に不備のある人はいますか？」

教室は五十人の生徒が普通に授業を受けるには過剰なほどの広さと設備があつた。

冷蔵庫には当然のように各種飲料やお菓子を含めた様々な食料が、エアコンは教室どころか各人に一台。それぞれが好みの温度に調整できるようになっている。

更に見渡してみると天井は総ガラス製でありながらスイッチ一つで開閉可能となっており、壁には格調高い絵画や観葉植物がさりげなく置かれていた。まるでホテルのロビーだ。

「参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給致します。他にも何か必要なものがあれば遠慮などすることなく何でも申し出てください」

おい、冷蔵庫の中身まで支給するのは少しおかしいだろ学園側。

「では、はじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」

「……はい」

名前を呼ばれて席を立ったのは、黒髪を肩まで伸ばした日本人形のような少女。

物静かな雰囲気を持つ彼女は、その整った容姿と相まって、穢れを近づけない神々しさを放っていた。

クラス全員の視線が集まる。

クラス代表　つまり二年生のクラスを編成する振り分け試験において、この教室内で誰よりも優秀な成績を納めた生徒。

更に言うなれば、学年で最高成績を誇るAクラスでのトップはそのまま二年生のトップということになる。注目を浴びるのは当然のことだろう。

「……霧島翔子です。よろしく願います」

そんな視線の中心にありながら顔色一つ変えずに淡々と名前を告

げる学年代表、霧島。

その目はクラスメイト全員にむけられているようでありながら、よく見ると同性の級友たちへのみ向けられていた。ヤツも同性愛者なのだろうか？

「Aクラスの皆さん。これから一年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように」

担任教師の結びの言葉が告げられ、霧島が会釈をして席に戻る。

と、こうしてはいられない。逝きたくはないが、私も自分のクラスへ向かわなければ。

私は走り出さない程度に廊下を急いで進んでいった。

二年F組と書かれたプレートのある教室の前に来た。早く入って遅刻を謝りたいところなんだが明久が邪魔で入れない。

「なんて、考えすぎかな」

明久が意味のわからない独り言を漏らす。そして勢いよくドアを開け、

「すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

愛嬌たつぷりにいい放つがその言葉は教壇に立っている男の一言によつて台無しとなった。教師じゃないことは明らかだ。

「聞こえないのか？ ああ？」

明久は睨み付けるように教壇に立っている男を見た。私も一方右にずれてその顔を確認する（残念ながら私は明久よりも身長が低い）。

その背は以外と高く、だいたい180cm強。やや細身ではあるが華奢なわけではない。むしろボクサーのような機能美を備えた細さを感じる。視線を上によらずと、現れたのは意思の強そうな目を

した野性味たっぷりの顔。短い髪の毛がツンツンと立っていてまるでたてがみのように見える。坂本だったのか。

「……雄二、何やってんの？」

「坂本、何で教壇に立ってるんだ？」

明久と同じタイミングで質問してしまふ。ちゃんと聞き取れたかどうか。

「お、翠もいたのか。安心しろ翠、ウジ虫野郎は明久だからな」

「大丈夫だ。私だったとしても特に気にする気はない。で、二度目だが何で教壇に立ってるんだ？」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみただ」

「先生の代わりって、雄二が？ 何で？」

明久が口を挟む。

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？ それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

ニヤリと口の端を吊り上げる坂本。明久の顔も綻んでいる。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

ふんぞり返って床に座っているクラスメイトたちを見下ろしている坂本。

そう、クラスメイトは皆床に座っている。理由は簡単、椅子がないからだ。

「そう言えば、雄二と翠って知り合いなんだね？」

「まあな。振り分け試験当日の朝に少し話した。正直あの時は翠のこと」

馬鹿かと思っていたとかだったら一発殴る。

「女かと思っていた」

「……どうやら殺されたいようだな」

私は指をポキポキ鳴らす。まあ確かに私は前世は女だったし見た

目もほとんど前世と変わってないが。

「わ、悪かった！ 俺が悪かったから落ち着け翠！？」

「……次そんな発言をしたら逝くと思え」

ちっ、いいストレス発散になると思ったのに。

「それにしても……流石はFクラスだね」

明久が話題を変えようとしているのか突然こんな話を切り出す。
とりあえず座れそうなスペースでも探すか。

「えーと、ちよっと通してもらえますかね？」

不意に背後から覇気のない声が聞こえてきた。

そこには寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、
いかにも冴えない風体のオッサンがいた。どう見たって十代には見
えないしこのオッサンが担任だろう。

「それと席についてもらえますか？ ホームルーム HRを始めますので」

「はい、わかりました」

「うーす」

「へーい」

私たちはそれぞれ返事をして（上から順に明久、雄二、私だ）そ
こらの席（？）に着く。

先生は私たちを待ってから壇上でゆっくりと口を開いた。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろし
くお願いします」

福原先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとしたが、やめた。チヨ
ークすらろくに用意されていないようだ。仕方ない、黒板消しと一
緒に明日持ってくるか。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？ 不備があれ
ば申し出てください」

五十人程度の生徒が所狭しと座っている教室には机がない。ある
のは畳と卓袱台と座布団。何とも斬新すぎる設備だ。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」

と、クラスメイトの誰かが先生に設備の不備を申し出る。

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

教室の隅には蜘蛛の巣が我が物顔で形成されており、壁はひび割れや落書きのない箇所を探す方が困難といった状態だった。まるで廃屋のようだ。想像以上に酷い。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

どこからというわけでもなく、教室全体からかび臭い独特の空気が漂う。きつと床に敷き詰められている古い畳のせいだろう。明日の朝は玄関の前に家の車がとまることになりそうだな。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

福原先生の指名を受け、車座を組んでいた廊下側の生徒の一人が立ち上がり、名前を告げる。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

ん、誰かと思えば秀吉じゃないか。

独特の言葉遣いと小柄な体。肩にかかる程度の長さの髪をゆつたりと縛っていた。そしてもう一つ付け加えるならば『美少年』という言葉が等しいアイツは木下秀吉。男子同級生を下の名前で呼んだのはアイツが初めてだった。

「というわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

軽やかに微笑みを作り秀吉は自己紹介を終えた。

「……………土屋康太」

秀吉が座つたと同時に次のヤツが立ち上がり名前を告げた。

口数が少ないヤツのようだ。小柄だが引き締まった身体で運動神経も良さそうだな。どうしておとなしくしているのだろうか。

にしても、見渡す限り男だな。学力最低クラスともなれば、女子

もほとんどいないのだろう。

「　です。海外育ちで、会話はできるけど読み書きが苦手です」
少し考え事をしているうちにまた次のヤツだ。……この声はどこかで聞いたような気がする。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は」
この声でドイツ育ちとなると、私の中で該当するのはただ一人。
名前は確か、

「趣味は吉井明久を殴ることです」

Minami Simada、しまだ みなみ島田美波だった（下の名前で呼んだのは前世含み美波が初めてだった）。日本に来て恐ろしくピンポイントかつ危険な趣味を持ったようだ。いつ日本に来たんだろうか。

「はろはろー」

美波は笑顔で前の席の明久に手を振る。

「……あう。島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

美波の自己紹介が終わり、その後は淡々と自分の名を告げるのみの作業が進む。

突然明久が軽く息を吸い、立ち上がった。明久の番が来たんだろう。

この馬鹿のことだ、きつとろくなことを言わないに決まってる。

「　コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

糞馬鹿。

『ダアアーーリイーン!!』

野太い声の合唱。急に吐き気がしてきた。畜生、吐いたら全部お前の責任だからな糞馬鹿野郎。

「失礼。忘れてください。とにかくよろしく願います」

作り笑いでごまかし、青い顔の明久は席に着く。吐き気が止まらない。Fクラスはいろいろとおかしい気がする。

……次は私の番か。適当に済ませておこう。

私はスツと立ち上がった。

「刹那翠だ。得意科目は日本史と保健体育、苦手科目は科学や数学などの理系。今日から文月学園に通うこととなった。一年間よろしく頼む」

そして一分もかけずに自己紹介を終わらせ、席に着く。

その後もしばらく名前を告げるだけの単調な作業が続き、いい加減に眠くなってきた頃に不意にガリと教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ？』

誰からというわけでもなく、教室全体から驚いたような声がかかる。

クラスがにわかに騒がしくなる中、数少ない平然としている人物の一人、福原先生がその姿を認めて話しかけた。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんひめじも願います」

「は、はい！ あの、姫路瑞希みずきといいます。よろしく願います

……」

小柄な身体をさらに縮こめるようにして声を上げる姫路。

肌は新雪のように白く、背中まで届く柔らかそうな髪は、優しい彼女の性格を表しているようだ。その可憐な容姿は、男だらけのFクラスで異彩を放っている。

「はいっ！ 質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が高々と右手を挙げる。

「あ、は、はいっ。なんですか？」

登校するなり、質問がいきなり自分に向けられ驚く姫路。

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

凄く失礼な質問が浴びせられる。

私は明久の背を軽くつついた。

（どうしたの？）

（今質問したヤツ失礼すぎないか？ というわけでぶっ殺していいか？）

（殺しちゃだめだよ翠！ それにこれはクラス全員の疑問なんだよ）

（どういうことだ？）

（姫路さんの可憐な容姿は人目を引くし、何よりその成績が凄いだ。入学して最初のテストでは学年二位を記録して、その後も上位一桁に常に名前を残しているほどだったんだよ）

なるほど。そんな姫路が最下層に位置するFクラスにいるわけがない。誰もが彼女はAクラスにいると思っているのだろう。

「そ、その……」

緊張した面持ちで身体を硬くしながら姫路が口を開く。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

その言葉を聴き、クラスの人々は『ああ、なるほど』とうなずいた。

試験途中での退席は0点扱いとなる。きっと姫路は昨年度に行われた振り分け試験を最後まで受けられず、結果としてFクラスに振り分けられてしまったというワケだろう。

そんな姫路の言い分を聞き、クラスの中でもちらほらと言いつの聲が上がる。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出てFクラスに』

『ああ。科学だろ？ アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝せてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

これは予想以上に馬鹿だらけだ。

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そんな中、逃げるように明久と坂本の隣の卓袱台に着こうとする
姫路。

「き、緊張しましたあゝ……」

席に着くや否や、姫路は安堵の息を付いて卓袱台に突っ伏す。

「あのさ、姫」

「姫路」

明久の声にかぶせるように隣に座っている坂本が姫路に声をかける。
る。

明久は相当残念そうな顔をしていた。

「は、はいつ。何ですか？ えーっと……」

慌てて坂本の方を向き、裾を正す姫路。いすではなく座布団に座
っているため、襟が乱れやすいのだろう。

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

姫路は深々と頭を下げる。育ちがよさそうな奴だ。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

思わずという風に口を挟む明久。

「よ、吉井君！？」

明久の顔を見て驚く姫路。まあ確かに明久はブサイクすぎて驚く
な。

「姫路。明久がブサイクですまん」

私も思わず口を挟む。

「そ、そんな！ 目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃじゃないですよ！ その、むしろ…」

…」

顔を赤くして口ごもる姫路。姫路は明久に惚れているようだ。そんな姫路の前で明久を悪く言うのは流石に可哀想だろう。

「……まあ、そう言われると確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。あ、私は刹那翠だ。よろしくな姫路」

「よ、よろしくお願いします」

私のほうを向いて深々と頭を下げた。釣られて頭を下げてしまう。「あ、そういえば俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいた気がするな」

という坂本の情報。明久は意外とモテるようだ。

「え？ それは誰」

「そ、それって誰ですか！？」

明久のセリフが姫路に遮られる。ライバルは知っておいた方がいいという判断からだろうか。

「確か、久保^{くほ}」

久保なんて女子は聞いたことがない。久羽ならあるが。

「利光^{としみつ}だったかな」

久保利光 名前からして（性別／男）

この学園にも同性愛者がいたようだ。

「……………」

「おい明久、声を殺してさめざめと泣くな」

知ったのが高校時代でよかったな明久。私なんか小学の頃から同性愛者に付きまとわれているんだぞ。

「半分冗談だ。安心しろ」

「え？ 残りの半分は？」

「それより姫路、もう体は大丈夫なのか？」

「あ、はい。もうすっかり平気です」

「ねえ雄二！ 残りの半分は！？」

明久の声の空耳が聞こえる気がするが気にしない。

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

空耳じゃなかったらしい。バンバン、と教卓を叩いて先生が警告を発してくる。

「あ、すみませ」

バキィッ バラバラバラ……

突如、先生の前で教卓がゴミ屑と化す。まさか軽く叩いただけで崩れ落ちるとは。どこまで最低な設備なのだろうか。

「え……替えを用意してきます。少し待っていてください」
気まずそうに告げると、先生は足早に教室から出て行った。
改めてこの教室の酷さを思い知らされてしまった。

「あ、あはは……」

明久の隣で姫路が苦笑いをしていた。

そういえばこの盗聴器、誰に付けようか。Fクラスで盗聴をして面白そうな奴はそんなにいないかもしれない。馬鹿すぎて。

右袖を見ながらふと思う。

実は私は右袖に防水・GPS機能付きの盗聴器と小型イヤホンを隠し持っている。勿論イヤホンも防水機能付きだ（GPSは付いていない。だってイヤホンにGPSが付いていても不便だけだろう？）。

袖をめくる が、盗聴器が見当たらない。あるのはイヤホンのみ。

……まさか、どこかで落としたか？ 落としたなら音でわかるだろう。

私は耳にイヤホンをつけ、スイッチを入れる。すると聞こえたのは、

「『……雄二、ちょっといい？』」

あくびをしているクラス代表に話しかけた明久の声。

「『ん？ なんだ？』」

「『ここじゃちよつと話しにくいから、廊下で』」

「『別に構わんが』」

立ち上がって廊下に出る。

盗聴器は今明久のネクタイに付いているようだ。明久の声の方がよく聞こえた。

よし、このまま受信し続ければ廊下での会話もよく聞こえるはずだ。

『んで、話つて？』

『この教室についてなんだけど……』

『Fクラスか。想像以上に酷いもんだな』

『雄二もそう思うよね？』

『勿論だ』

『Aクラスの設備は見た？』

『ああ。凄かったな。あんな教室は他に見たことがない』

AクラスとFクラス、凄い差だ。一方はチョークすらないひび割れた黒板で、もう一方はプラズマディスプレイ。これに不備のない人間はいないだろう。

『そこで僕からの提案。折角二年生になったんだし、ししょうせんそう『試召戦争』をやってみない？』

『戦争、だと？』

『うん。しかもAクラス相手に』

『……何が目的だ？』

警戒されているようだ。

『いや、だってあまりにも酷い設備だから』

『嘘をつくな。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなことはありえないだろうが』
『そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校に来るわけが』

『

『お前がこの学校を選んだのは『試験校だからこその学費の安さ』が理由だろ?』

つまり明久はそんなに金がないのか。きっと一人暮らしで仕送りをしてもらっているのにも関わらず他の趣味等に消しているのだろう。家族と暮らしているならそんな理由でこの学校に着たりなんかしないはずだ。

『あー、えーっと、それは、その……』

『……姫路の為、か?』

『ど、どうしてそれを!?!』

『本当にお前は単純だな。カマをかけるとすぐ引つかかる』

確かに坂本の言うとおり、単純だ。

『べ、別にそんな理由じゃ』

『何やってるの翠? ぼーっと外見て』

不意に右から美波に話しかけられる。

『い、いやなんでもない』

私はイヤホンのスイッチを切る。

『そう? なんでもないようには見えなかったわよ。まあいいけどふう、よかった。美波が盗聴器について興味を示さない奴でよかったと思う。いろいろと違う気がするが。』

『それにしても、久しぶりね翠。二・三年ぶりかしら』

『ああ、そうだな。会ったのが中二の夏だからそれくらいだろう』

美波に会ったのは中学二年の夏休み、ドイツへ旅行に行ったときだった。黄色いリボンとポニーテールと気の強そうな目が特徴的だったため、よく覚えていた。

『葉月は元気にしてるか?』

ちなみに、美波には7つ年下の妹・葉月がいる。笑顔がほとんど絶えない奴だった。

『ええ。とても元気よ。前と変わってないわ。……あ、先生が戻ってきたみたい。じゃ、後でね』

美波が席に戻っていった。その後、明久と坂本が席に戻ってきた。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

壊れた教卓を変えて（それでもボロだが）、気を取り直してHRが再開される。

「えー、須川亮すがわりようです。趣味は」

特に何も起こらず、また淡々とした自己紹介の時間が流れる。

「坂本君、君が自己紹介の最後の一人ですよ」

「了解」

先生に呼ばれて坂本が席を立つ。

ゆつくりと教壇に歩み寄るその姿はさっきまでのふざけた姿は見られず、クラスの代表として相応しい貫禄を身に纏っているように思えた。

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

先生に問われ、鷹揚おうように頷く坂本。

別にクラス代表といっても、学年で最低の成績を収めた生徒たちが集まるFクラスの話。何の自慢にもならないどころか恥になりかねない。

それにも関わらず、坂本は自信に満ちた表情で教壇に上がり、私たちの方に向き直った。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

クラスメイトから大して注目されるわけでもない。Fクラスという馬鹿の集まりの中で比較的成績が良かったというだけの生徒。他から見れば五十歩百歩といった存在。

「さて、皆に一つ聞きたい」

そんな生徒が、ゆつくりと、全員の目を見るように告げる。

間の取り方が上手いせいか、全員の視線はすぐに坂本に向けられるようになった。

皆の様子を確認した後、坂本の視線は教室内の各所に移りだす。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて私たちも坂本の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。

「Aクラスは冷房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが

」

一呼吸おいて、静かに告げる。

「不満はないか？」

『大ありじゃあっ!!』

二年F組生徒の魂の叫び。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する!』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎ

る！」

堰^{せき}を切ったかのように次々と上がる不満の声。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

級友たちの反応に満足したのか、自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが」

これから戦友となる仲間たちに野性味満点の八重歯^{やえは}を見せ、

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

五問目（前書き）

【第二問】

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『（１）得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『（２）悪いことがあった上にさらに悪いことがおきる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『（１）弘法も筆の誤り』
- 『（２）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（１）なら『河童の川流れ』や『猿も樹から落ちる』、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『（１）弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

刹那翠の回答

- 『（１）猿の川流れ・河童も樹から落ちる』
- 『（２）泣きつ面踏んだり』

教師の回答

いろいろおかしいことに気づいてください。

吉井明久の答え

『（２）泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

五問目

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる。

確かに誰が見ても、秀才が集まるAクラスとバカが集まるFクラスの戦力差は明らかだった。

文月学園に点数の上限がないテストが採用されてから四年が経過した。

このテストには一時間という制限時間と無制限の問題数が用意されている。その為、テストの点数は上限がなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができる。

また、科学とオカルトと偶然により完成された試験召喚システムというものがある。これはテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を喚び出して戦うことのできるシステムで、教師の立ち会いの下で行使が可能となる。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試み。その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争。試召戦争と呼ばれる戦いだ。

その戦争で重要になるのがテストの点数なのだが、AクラスとFクラスの点数は文字通り桁が違う。正面からやりあったとしたら、Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝てるかどうか。いや、学

年首席・次席ともなれば四・五人でも負けるだろう。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」
そんな圧倒的な戦力を知りながらも、坂本はそう宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡る。

確かに誰がどう考えても勝てる勝負とは思えないだろう。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

こんな坂本の言葉を受けてクラスが更にざわめく。

根拠がある、だと？ まさか。姫路以外はほぼクズに等しい奴等が揃っていると言ふのに。

「それを今から説明してやる」

不適な笑みを浮かべ、壇上からクラスメイトを見下ろす代表。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとるのは土屋康太。

姫路がスカートの裾を押さえて遠ざかると、ソイツは顔についた畳の跡を隠しながら壇上へと歩き出した。

「土屋康太。こいつがあ有名な^{ムツリーニ}寡黙なる性識者だ」

「……………！！（ブンブン）」
^{ムツリーニ}寡黙なる性識者？

私は再び明久の背を軽くつつく。

（今度は何？）

（ひとつ聞きたい。ムツリーニとはなんだ？）

（ただの『ムツリスケベ』のことだよ）

なるほど。

『ムツツリー二だと……?』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……?』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ……!』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……!』

畳の跡を手で押さえている姿が果てしなく哀れを誘う。

「???」

姫路は頭に多数の疑問詞を浮かべているようだ。

まあ普通ならば秀才でもわからないだろう。『ムツツリー二』と
いうあだ名の由来なんて。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく
知っているはずだ」

「えっ? わ、私ですか?」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

もし試召戦争に至るとなれば、確かに彼女ほど頼りになる戦力は
いないだろう。

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらなないな』

誰だ、さつきから姫路に熱烈ラブコールを送る気持ち悪いヤツは。
「木下秀吉だっている」

秀吉? 秀吉も成績がいいのか?

『おお……!』

『ああ。アイツ確か、木下優子の……!』

木下優子の、なんだろうか。

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学校の頃は神童とか呼ばれていなかったか?』

……まさかとは思っていたが、やっぱりそうだったか。

坂本雄二。その名前は私も聞いたことがあった。成績の良さは上級生をも超え、小学校の頃は神童と呼ばれていたらしい。中学からは知らない。きっと中学で真面目に勉強していなくて成績が伸びなくなりその結果Fクラス送りになるほど成績が落ちたのだろう。

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

体調不良のわけがない。あの朝、坂本は普通に走っていた。

『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな!』

いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気は教室中に満ちていた。気がつけば、クラスの士気は確実に上がっていた。

「それに、吉井明久だっている」

……シン

そして一気に下がる。

なぜそこで明久の名前を上げる？ 明久はいてもいなくても同じような雑魚だと思うが。

「ちよつと雄二！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！ 全くそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！ 折角上がりかけていた士気に翳りが見えてるし！ 僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを って、どうして僕を睨むの？ 士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

明久のせいだと思うのは私だけではないようだ。

名前が出て士気が下がった「名前」の人物のせいじゃないのか？

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ」

《観察処分者》？ なんだそれは。 ペナルティ 罰か？

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

クラスの誰かがそんな台詞を口にする。

「ち、違うよっ！　ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

そうか。バカの代名詞なのか。明久にぴったりの愛称だな。

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路が小首を傾げている。頂点に近い場所にいた彼女にバカの代名詞であるこの単語（？）は馴染みがないらしい。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類いの雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

本来、試験召喚獣は物に触ることができない。彼らが触れることができるのは他の召喚獣のみ。要するに幽霊のようなものだ。もっとも、校内の床には特殊な処理が施してあるらしいから、立つことくらいはできるようだが。

「そうなんですか？　それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよ」

姫路の目がキラキラと輝いている。

「そんな大したもんじゃないと思うぞ」

私は思わず口をはさんだ。

「翠の言う通りだよ」

手を振って否定のポーズをとる明久。

本当に大したものではない。自分の思うとおりに使役できるのなら凄く便利だ。なにせ、試験召喚獣の力はクズのような点数でもかなり強い。やろうと思えば岩だって砕けるだろう。

しかし、召喚獣は教師の監視下でなければ喚び出せない。つまり、便利に使いたくても使えないのだ。

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやら

れると本人も苦しいってことだろ？」

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな』

本当に罰^{ペナルティ}だったようだ。しかし興味はある。あとで詳しく聞いてみるか。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな？」

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すごい大胆に無視された！」

「黙れ明久^{バカ}。でかい声で独り言を言うな」

「翠にはこれが独り言にしか見えないの！？」

明久と書いてバカと呼んだのにはつつこまないんだな。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆^{ぜんいんペン}を執^とれ！ 出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！』

「お、おー……」

クラスの雰囲気^おに圧^おされたのか、姫路も小さく拳を作り掲げていた。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ
て行ってみろ」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

わずかな逡巡すらく力強く断言する坂本の目からは、

『嘘に決まってるんだろバーカ』

と思っているのが伝わってくる。目を見て何を考えているか、それを当てるのは私の特技だ。

「大丈夫。俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」
してるだろ。

「わかったよ。使者は僕がやるよ」

明久は見事に騙されたようだ。

「ああ。頼んだぞ」

クラスメイトの歓声と拍手に送り出され、明久は毅然とした態度でDクラスに向かって歩き始めた。

「坂本」

「なんだ翠」

「明久って単純だな」

「ああ。それが明久だ」

「あとバカだな」

「そうだな」

「騙されたあつ！」

そう叫びながらFクラスに転がり込む明久。

息を切らせて床にへたりこむ明久に坂本が視線を落とし、

「やはりそうきたか」

平然と言い放った。

「やはりってなんだよ！ やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が勤まるか」

「少しは悪びれるよ！」

普通は悪びれない。

「吉井君、大丈夫ですか？」

ところどころ制服まで破れている明久の有様を見て、姫路が明久に駆け寄る。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

男として心配をかけまいとしているのだろう。

「吉井、本当に大丈夫？」

私には美波が心配しているようには見えなかった。

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！ もうダメ！ 死にそう！」

慌てて腕を押さえて転げまわる。そういうことだろうと思った。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

他の場所で話し合いをするつもりのように、坂本は扉を開けて外に出ていった。

「あの、痛かったら言ってくださいね？」

そう告げ、姫路は小走りに坂本の後を追った。

「大変じゃったの」

秀吉が明久の方を叩いて廊下に出る。

「……………（サスサス）」

自分の頬の辺りをさすりながら土屋が続く。

「ムツッリーニ。覗いてたときの畳の跡ならもう消えてるよ？」

「……………！！（ブンブン）」

「いや、今更否定されても、ムツッリーニがHなのは知ってるから」

「……………！！（ブンブン）」

「ここまでバレているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いのと思う」

「……………！！（ブンブン）」

「何色だった？」

「みずいろ」

「即答かよおい。」

「やっぱりムツツリーニは色々な意味で凄いよ」

「……………！！（ブンブン）」

「明久たちがのんびり教室内で話をしていると、」

「ほら吉井、翠。アンタたちも来るの」

「ぐいっと美波に腕を引張られた。」

「明久は面倒くさそうな目をしていた。」

「もちろん行くつもりだぞ」

「あー、はいはい」

「返事は一回！」

「へーい」

「…………一度、Das Brechen ええと、日本語だと…………」

「美波が言いよどむ。」

「Das Brechen…………確か調教だったような。」

「……………調教」

「近くから土屋の声。」

「そう。調教の必要がありそうね」

「調教って。せめて教育とか指導って言ってくれない？」

「じゃ、中間としてZuchtingung」

「……………それはわからない」

「確か、日本語だと折檻だったかな？」

「折檻であってるぞ」

「それ悪化してるよね」

「そうか？」

「そう？」

「明久には折檻くらいがちょうどいいだろう。」

「というかムツツリーニ。どうして『調教』なんてドイツ語を知っ

てるの？ 翠も『折檻』なんてドイツ語どこで覚えたの？」

「……………一般教育」

「土屋と同じだ明久^{バカ}」

まあドイツに行くならドイツ語くらい知っておかなければな。

「……まあ、翠はよくわかんないけど相変わらずムツツリー二は性に関する知識だけズバ抜けてるね」

「……………！！（ブンブン）」

そんな会話をしながら校内を歩いていると、先頭の坂本が屋上に通じる扉を開けて太陽の下に出た。

雲一つない空から眩しい光が差し込む。

春風とともに訪れた陽光に、風ではためく姫路のスカートを注視している土屋を除き、私たちは全員目を細めた。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

坂本がフェンスの前にある段差に腰を下ろす。

「一応今日の午後に回線予定と告げて来たけど」

明久たちもそれにならって各々腰を下ろした。私はフェンスに寄り掛かっているが。

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ？」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

「明久。お前は昼食わないのか？」

これは私でも驚いた。

「いや。一応食べてるよ」

「……あれは食べていると言えるのか？」

坂本の横槍が入る。

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って 水と塩だろう？」

坂本の哀れむような声。

栄養足りてんのか……？

「きちんと砂糖だつて食べているさ！」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖つて、食べるとは言いませんよ……」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

苦労人だな明久……。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

……バカだ。究極のバカだ。少ないならその中でやりくりしろよ。一瞬でも苦労人だと思っってしまったのは恥じるべきことだろう。

「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

「え？」

この言葉には私も一瞬目を疑った。

「本当にいいの？ 僕、塩と砂糖以外の物を食べるなんて久しぶりだよ！」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

素直に喜ぶ明久。それはいいとして、

「塩と砂糖は食べると言わんぞ明久」

食べると言っ表現はおかしい。

「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

面白くなさそうな刺のある美波の言葉。本心は、

『弁当で好感度をあげようだなんて、瑞希もやるじゃないの……！』

……。

私はとても知ってはいけないことを知ってしまった気がする。

「あ、いえ！ その、皆さんにも……」

「俺達にも？ いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

明久が少し残念そうなのは気にしない。

「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「味には五月蠅いぞ？」

「……お手並み拝見ね」

姫路本人を含めると七人。作るのが大変そうだな。

「わかりました。それじゃ、皆に作ってきますね」

それでも嫌そうな顔一つしない彼女。

「姫路さんって優しいね」

「そ、そんな……」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

「にしたいと思ってました」

今ほど通報したいと思ったことはない。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

「だって……お弁当が……」

バカだな。

「さて。話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

そういえばそうだった。

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？ 段階を踏んでいくならEクラスじやろうし、勝負に出るならAクラスじやろう？」

「そつえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

坂本が鷹揚(ようよう)にうなづく。

「どんな考えなんだ？」

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？ でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

成績でクラスを分けられているため、Eクラスは当然私達(わたくし)のいるFクラスより振り分け試験の点数は良い。

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれないな。けど、実際のところは違う。オマエの周りにいる面子をよく見てみる」

「えーっと……」

明久がその場にいるメンバーを見回す。

「美少女三人と馬鹿が二人とムツツリが一人いるね」

お前を入れて私抜きだと馬鹿が三人で秀才が一人で帰国子女が一人でムツツリが一人だ。どうやったら女子が三人になるんだ。

「誰が美少女だと!？」

「ええっ!？ 雄二が美少女に反応するの!？」

「……………(ポツ)」

「ムツツリ二まで!？ どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない!」

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリ二」

秀吉がその場を制する。

「そ、そうだな」

「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツツコミ入れたいんだけど」

「ま、要するにだ」

コホン、と咳払いをして坂本が説明を再開する。

「姫路に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目的である以上はEクラスなんかと戦っても意味がないってことだ」

「? それならDクラスは正面からぶつかると厳しいの?」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

明久の目的は姫路の為のAクラス設備であって、Dクラスではない。

「初陣だからな。派手にやって今後の景気付けにしたいだろ? それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

作戦なんてあるのか。

「あ、あの!」

と、姫路にしては珍しくでかい声。

「ん？ どうした姫路」

「えっと、その。さっき言いかけた、って……吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて」

「それはそうと！」

明久は坂本の台詞を遮るように、わざとでかい声を出す。

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

明久の心配を笑い飛ばす坂本。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

不思議な感覚だった。

根拠のない言葉なのに、なぜかその気になってくる。

坂本の言葉にはそんな力があつた。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「ま、やってみる価値はあるか」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………（グッ）」

「が、頑張りますっ」

打倒Aクラス。

荒唐無稽な夢かもしれない。実現不可能な絵空事かもしれない。

しかし、やってみないと何も始まらない。

私自身のミスとはいえ、折角こうして同じクラスになったのだ。

このバカ達とともに何かを成し遂げてみるのも悪くない。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、私達は勝利の為の作戦とやらの耳を傾けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8913v/>

バカとテストと転生者の物語。

2011年10月10日03時24分発行